

各 関 係 機 関 団 体 の 長 員 } 殿
各 病 害 虫 防 除 員

福岡県農林業総合試験場長
(福岡県病害虫防除所)

令和4年度病害虫発生予報第6号(9月)について

このことについて、病害虫発生予報第6号を発表したので送付します。

予報第6号

水稲・大豆での病害の発生拡大に注意しましょう

本年は、水稲の葉いもちや紋枯病、大豆の葉焼病が一部地域で多発しています。現時点で病徴が確認されていないほ場でも、既に罹病し、気象条件によって病気が多発する可能性があります。発生状況に注意して防除に努めましょう。



写真1 水稲の葉いもち



写真2 水稲の紋枯病



写真3 大豆の葉焼病

9月における主な病害虫の発生動向は、次のように予想されます。

作物名	病害虫名	現況 (発生量)	9月の発生予報 (発生量)	
		平年比	平年比	前年比
水稲 (普通期)	いもち病	やや多	やや多	やや多
	紋枯病	やや多	やや多	並
	トビイロウンカ	少	少	並
	斑点米カメムシ類	多	多	多
大豆	ハスモンヨトウ	並	並	並
	吸実性カメムシ類	並	やや多	やや多

作物名	病害虫名	現況 (発生量)	8月の発生予報 (発生量)	
		平年比	平年比	前年比
かんきつ	黒点病 ミカンハダニ	やや少 やや多	やや少 やや多	並 やや多
かき	炭疽病 フジコナカイガラムシ ハマキムシ類	並 並 並	並 並 並	並 並 並
果樹共通	果樹カメムシ類 (チャバネアオカメムシ)	やや多 ³⁾	— ³⁾	多 ³⁾
冬春イチゴ (育苗期)	炭疽病 ハダニ類	やや多 やや少	多 並	多 並
野菜共通	ハスモンヨトウ オオタバコガ コナジラミ類	並 やや多 並 ⁴⁾	並 やや多 やや多 ⁴⁾	並 やや多 やや多 ⁴⁾
茶	炭疽病 もち病 カンザワハダニ チャノコカクモンハマキ チャノホソガ チャノキイロアザミウマ チャノミドリヒメヨコバイ チャトゲコナジラミ	やや少 並 やや少 並 並 やや多 やや少	並 並 並 やや多 やや多 やや多 多 並	並 並 並 やや多 やや多 やや多 多 並

- 注 1) 予報の発生量は平年（福岡県の過去10年間）及び参考として前年との比較で、「少、やや少、並、やや多、多」の5段階で示しています。
- 注 2) 予報の根拠には、巡回調査、防除員の調査、予察灯・トラップでの誘殺状況調査等に基づく発生状況、気象予報からみた病害虫の発生条件を必要に応じて記載しています。
それぞれの条件は、少発生（－）、やや少発生（－～±）、並発生（±）、やや多発生（±～＋）、多発生（＋）として示し、＋を総合的に判断して発生量を予想しています。
- 注 3) 果樹共通・果樹カメムシ類の発生量は年次間変動が大きいので、前年比としています。
- 注 4) 野菜共通・コナジラミ類は、2018年から調査を実施しているため、平年は過去4年間としています。

病害虫防除所のホームページでは、各種病害虫の発生状況を随時更新しています。
発生状況の把握や防除の参考にご活用下さい。

- 福岡県病害虫防除所のホームページへのアクセス
URL: <https://www.jpnp.ne.jp/fukuoka/> または右QRコード①



- Twitter（ツイッター）で定期情報や警報等発出のお知らせを始めました。
Twitterの本アカウント（福岡県農作物病害虫情報）へのアクセス
URL: https://twitter.com/PPDPO_Fukuoka または右QRコード②



<予想される向こう1か月の天候（令和4年8月27日～9月26日）>

暖かい空気に覆われやすいため、向こう1か月の気温は高く、特に期間の初めはかなり高くなる見込みです。前線や湿った空気の影響を受けにくいため、向こう1か月の降水量は平年並か少なく、日照時間は多いでしょう。

向こう1か月の気温・降水量・日照時間（数値は予想される出現確率）

九州北部地方	平均気温	降水量	日照時間
九州北部地方	低20 並30 高50% 平年より高い見込み	少20 並40 多40% 平年並か多い見込み	少40 並40 多20% 平年並か少ない見込み

（福岡管区气象台 令和4年8月25日発表1か月予報より抜粋）

【普通作物：水稲】

普通期水稲

1 いもち病（穂いもち）

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年よりやや多

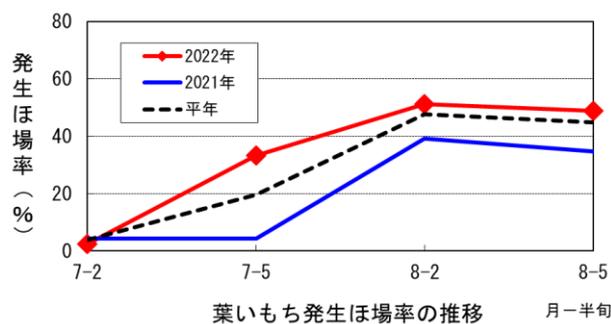
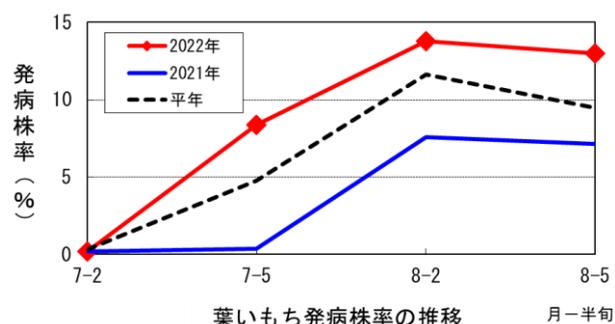
(2) 予報の根拠

ア 8月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや多かった（±～+）。

（葉いもち）発病株率 13.0%（平年 9.5%、前年 7.1%）

発生ほ場率 48.9%（平年 44.7%、前年 34.8%）

イ 向こう1か月の気象予報では、やや多発生の条件となっている（±～+）。



(3) 防除上注意すべき事項

ア 使用農薬は「令和4年度普通作病害虫・雑草防除の手引き」を参照する。

イ 農薬の使用及び散布等にあたっては、p16の内容を確認の上、農薬の使用基準（使用時期、使用回数等）を遵守し、周辺ほ場への飛散防止対策を講ずる（以下の病害虫についても同じ）。

2 紋枯病

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多、前年並

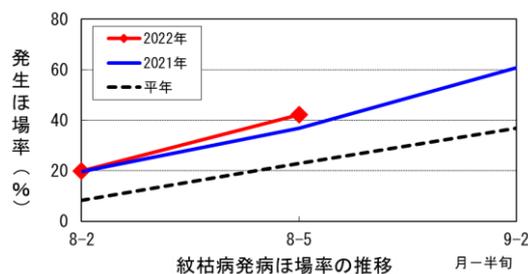
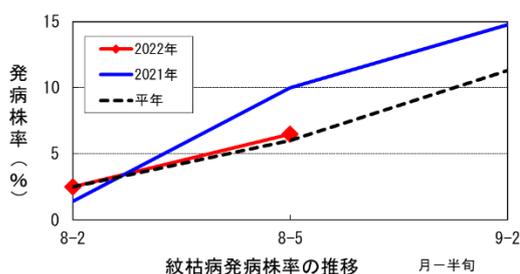
(2) 予報の根拠

ア 8月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや多かった（±～+）。

発病株率 6.5%（平年 6.0%、前年 10.0%）

発生ほ場率 42.2%（平年 22.9%、前年 37.0%）

イ 向こう1か月の気象予報では、多発生の条件となっている（+）。



(3) 防除上注意すべき事項

ア 出穂期以降、病斑の上位進展が認められる場合は防除を行う。

3 トビイロウンカ

(1) 予報の内容

発生量：平年より少、前年並

(2) 予報の根拠

ア 8月5半月調査の結果、発生量は平年より少なかった（-）。

10株当たり払い落とし成幼虫数0.2頭（平年31.7頭、前年0頭）

発生ほ場率20.0%（平年48.2%、前年0%）

イ 向こう1か月の気象予報では、やや多発生の条件となっている（±〜+）。

(3) 防除上注意すべき事項

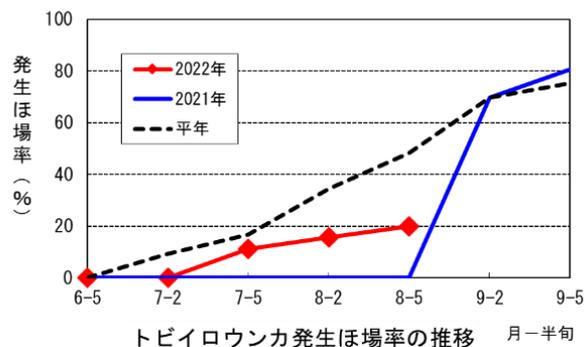
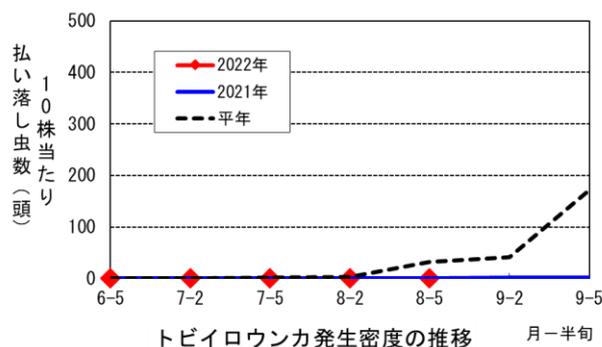
ア 本種は地域およびほ場による発生の差が大きく、世代を経るごとに急激に増加する。発生予想パターン図を参考にほ場における発生状況を把握し、発生が多い場合は幼虫期に防除を行う。

・福岡県の要防除水準（払い落とし調査による中老齢幼虫の合計数）

飛来後第2世代：100株当たり 100頭以上

9月末：100株当たり 1000頭以上

イ 出穂後は薬剤が株元まで到達しにくくなるため、株元に確実に届くよう丁寧に散布する。



4 斑点米カメムシ類

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年より多

(2) 予報の根拠

ア 県下5か所の予察灯における5月1半月～8月4半月の誘殺虫数は、平年・前年より多かった（+）。

・主要3種カメムシ<クモリカメシ、ホリカメシ、シロカメシ>

74頭（平年47頭、前年11頭）

・ミナミアオカメムシ

1083頭（平年172頭、前年81頭）

・アカスジカスミカメ

655頭（平年949頭、前年556頭）

・イネカメムシ

183頭（前年21頭）

イ 8月5半月調査の結果、発生量は平年より多かった（+）。

・主要3種カメシ（クモリカメシ、ホリカメシ、シロカメシ）

20回すくい取り虫数1.5頭（平年0.6頭、前年0.3頭）

発生ほ場率40.6%（平年20.3%、前年20.0%）

・ミナミアオカメムシ

20回すくい取り虫数0.2頭（平年0.0頭、前年0.2頭）

発生ほ場率12.5%（平年1.5%、前年4.0%）

・アカスジカスミカメ

20回すくい取り虫数0.1頭（平年0.8頭、前年0.6頭）

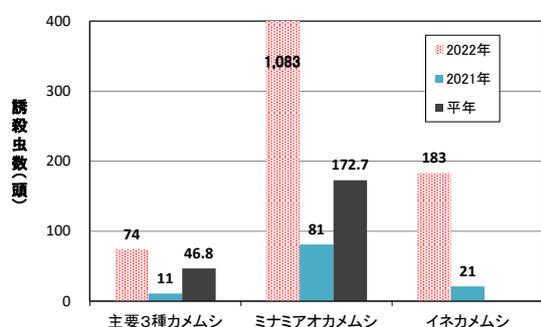
発生ほ場率 6.3% (平年 17.2%、前年 20.0%)

・イネカメムシ

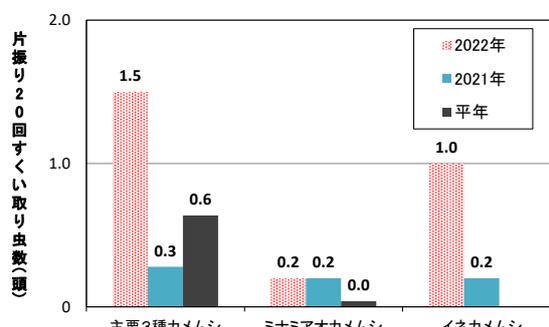
20回すくい取り虫数 1.0頭 (前年 0.2頭)

発生ほ場率 21.9% (前年 8.0%)

ウ 向こう1か月の気象予報では、やや多発生の条件となっている(±~+)。



予察灯におけるカメムシ類の誘殺状況
(5月1半旬~8月4半旬)
注)イネカメムシの調査は2019年より実施



ほ場におけるカメムシ類の発生密度(8月5半旬)
注)イネカメムシの調査は2021年より実施

(3) 防除上注意すべき事項

ア 詳細は注意報第1号(8月31日発表)を参照する。

イ 防除適期は穂揃い7~10日後である。ほ場の状況を観察し、発生が多い場合は再度防除を行う。

ウ カメムシ類は広範囲に移動するので、できるだけ広域一斉防除を実施する。

【普通作物：大豆】

1 ハスモンヨトウ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 8月5半旬調査の結果、白変葉の発生量は平年よりやや多かった(±~+)。

100株当たりの白変葉発生株数 1.0株 (平年 1.4株、前年 0.1株)

発生ほ場率 66.7% (平年 40.0%、前年 18.2%)

イ 8月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった(±)。

10株当たり払落とし幼虫数 1.7頭 (平年 2.5頭、前年 0.4頭)

発生ほ場率 58.3% (平年 63.8%、前年 45.5%)

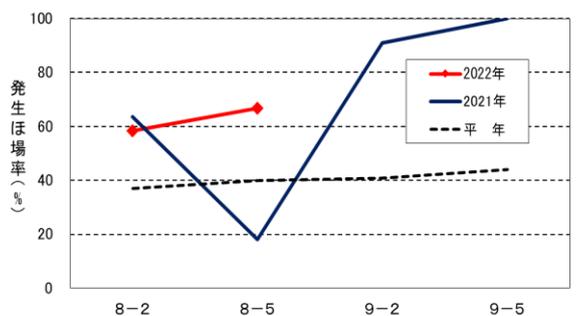
ウ 8月1半旬~4半旬のフェロモントラップにおける誘殺成虫数は平年並であった(±)。

筑紫野市 202頭 (平年 324頭、前年 439頭)

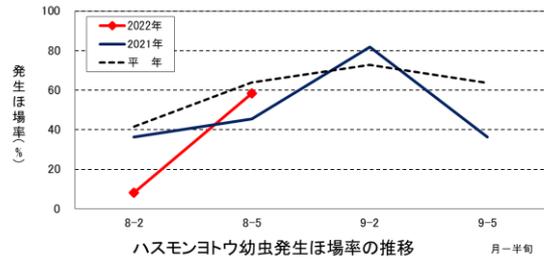
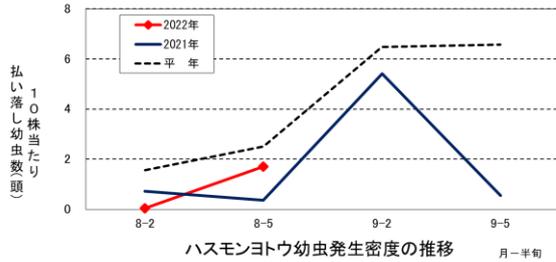
筑後市 216頭 (過去9カ年平均 559頭、前年 444頭)

行橋市 238頭 (平年 189頭、前年 75頭)

エ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている(±)。



白変葉発生ほ場率の推移



(3) 防除上の注意

ア 葉の食害による減収量が大きい時期は開花期後7~20日頃(例年8月下旬~9月上旬)である。この時期に分散前の若齢幼虫が群棲している白変葉は、見つけ次第除去するとともに、防除を実施する。

イ フェロモントラップを活用した防除適期の目安は、誘殺ピークから10日目頃であるが、地域によって誘殺数に差があるため、ほ場で発生状況を確認して薬剤防除を実施する。

ウ 今後の発生状況等については、病害虫防除所ホームページを参照する。

<<http://www.jppn.ne.jp/fukuoka/doukou/hassei.html>>

2 吸実性カメムシ類

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年よりやや多

(2) 予報の根拠

ア ミナミアオカメムシの県下5カ所の予察灯における5月1半旬~8月4半旬の誘殺虫数は平年より多かった(+).

1,083頭(平年172頭、前年81頭)

イ 8月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった(±).

・ミナミアオカメムシ・アオクサカメムシ

10株当たり払落し虫数0.0頭(平年0.0頭、前年0.1頭)

発生ほ場率8.3%(平年1.8%、前年18.2%)

・イチモンジカメムシ

10株当たり払落し虫数0.2頭(平年0.1頭、前年0.2頭)

発生ほ場率41.7%(平年7.0%、前年27.3%)

・ホソヘリカメムシ

10株当たり払落し虫数0頭(平年0.0頭、前年0.0頭)

発生ほ場率0%(平年4.7%、前年9.1%)

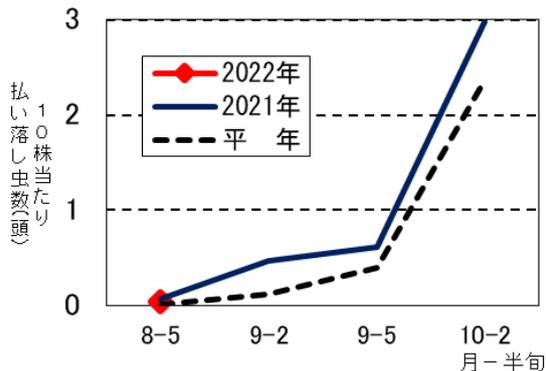
ウ 向こう1か月の気象予報では、やや多発生の条件となっている(±~+).

(3) 防除上の注意

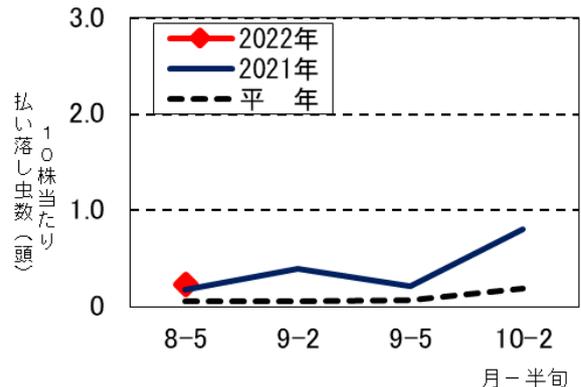
ア 防除適期は開花期後30日前後(例年9月中~下旬)であるが、多発生の場合はその7~10日後に2回目の防除を行う。

イ カメムシ類は収穫時まで子実被害が続くため、発生初期の防除を心掛ける。

ウ カメムシ類は広範囲に移動するので、できるだけ広域一斉防除を実施する。



ミナミアオカメムシ・アオクサカメムシ発生密度の推移



イチモンジカメムシ発生密度の推移

【果樹：かんきつ】

1 黒点病

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少、前年並

(2) 予報の根拠

ア 8月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや少なかった（-～±）。

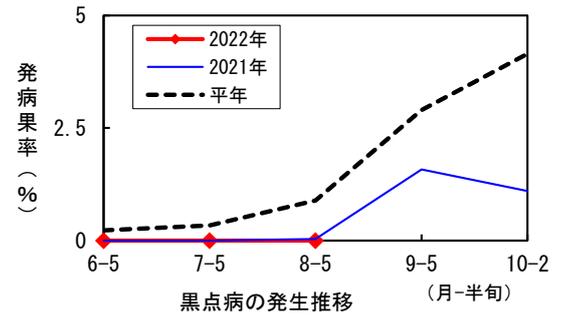
発病果率 0%（平年 0.9%、前年 0.03%）

発生ほ場率 0%（平年 31.9%、前年 9.1%）

イ 向こう1か月の気象予報では、やや多発生の条件となっている（±～+）。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 伝染源である枯れ枝は極力除去し、園外に持ち出し処分する。



2 ミカンハダニ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年よりやや多

(2) 予報の根拠

ア 8月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや多かった（±～+）

寄生葉率 7.3%（平年 7.5%、前年 0.4%）

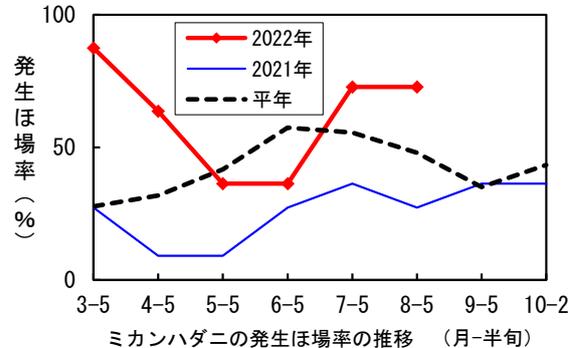
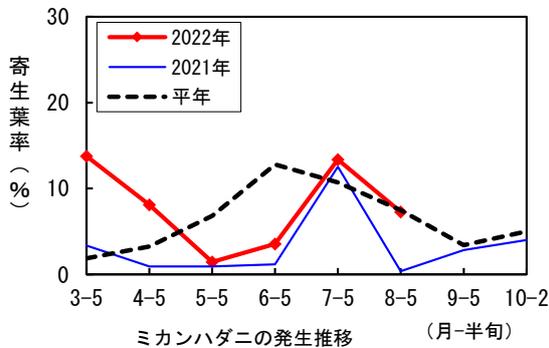
発生ほ場率 72.7%（平年 47.9%、前年 27.3%）

イ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている（±）。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 薬剤防除にあたっては、薬液が葉裏に十分かかるよう丁寧に散布する。

また、薬剤感受性の低下をさけるため、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。



【果樹：かき】

1 炭疽病

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 8月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった（±）。

発病枝率 0.5%（平年 0.06%、前年 0.3%）

発生ほ場率 9.1%（平年 4.3%、前年 9.1%）

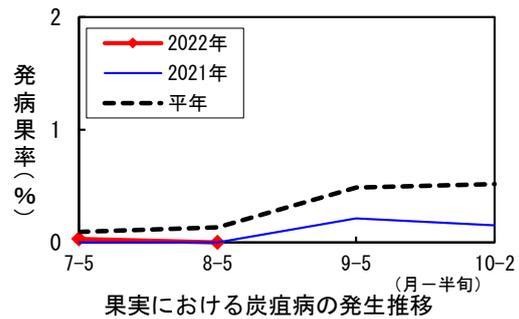
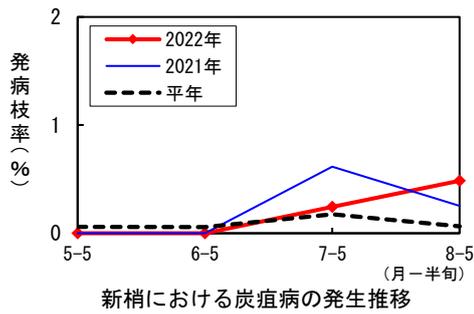
発病果率 0%（平年 0.13%、前年 0%）

発生ほ場率 0%（平年 10.7%、前年 0%）

イ 向こう1か月の気象予報では、やや多発生の条件となっている（±～+）。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 伝染源となる罹病枝や罹病果は、見つけ次第園外に持ち出し処分する。
- イ 降雨が続いた場合や、前年発生が多かった園では、薬剤防除を徹底する。



2 フジコナカイガラムシ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 8月5半月調査の結果、発生量は平年並であった(±)。

寄生果率 6.1% (平年 9.3%、前年 9.6%)

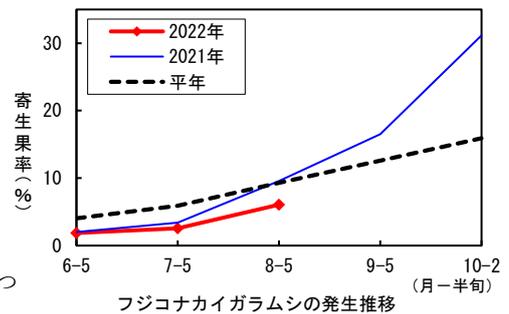
発生ほ場率 63.6% (平年 80.1%、前年 81.8%)

イ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている(±)。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 果樹カメムシ類の防除等で、やむを得ず天敵に影響のある薬剤を使用する際は、フジコナカイガラムシにも効果のある薬剤を選択する。

イ 薬剤がかかりにくい部位に寄生しているので、混み合った枝を整理するとともに、散布むらがないよう十分量の薬液を丁寧に散布する。



3 ハマキムシ類

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 8月5半月調査の結果、発生量は平年並であった(±)。

寄生果率 0.2% (平年 0.4%、前年 0.2%)

発生ほ場率 36.4% (平年 33.7%、前年 36.4%)

イ 第2～3世代と考えられる7月1半月～8月5半月

のフェロモントラップによる雄成虫誘殺数は、平年よりやや少なかった(－～±)。

誘殺数：チャノコカクモンハマキ <うきは市> 128頭 (平年 348頭、前年 258頭)

<八女市> 734頭 (平年 505頭、前年 922頭)

：チャハマキ

<うきは市> 2頭 (平年 7頭、前年 9頭)

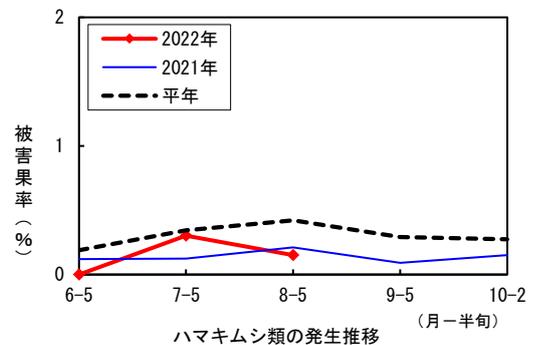
<八女市> 5頭 (平年 31頭、前年 51頭)

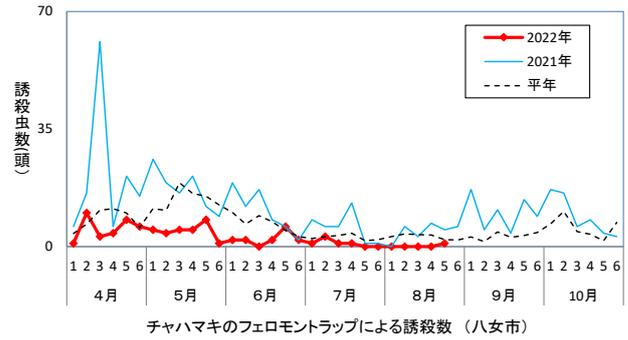
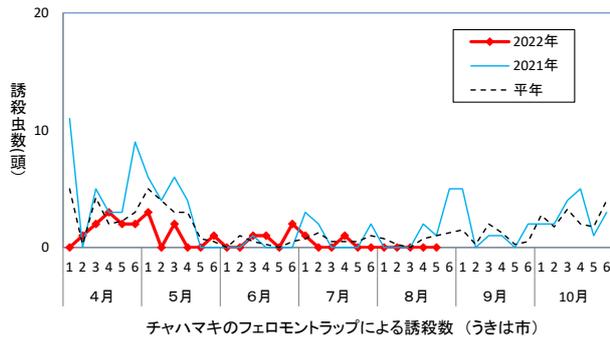
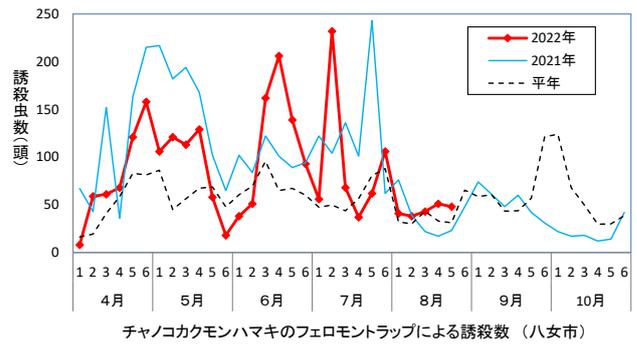
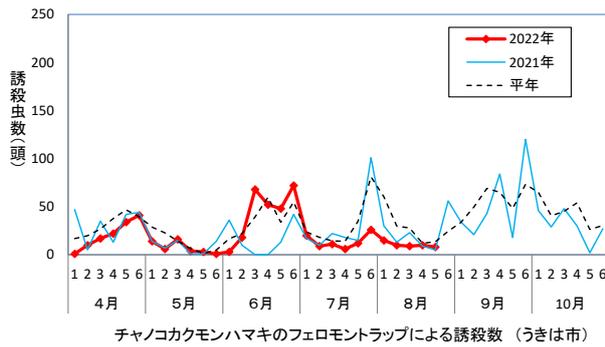
ウ 向こう1か月の気象予報では、やや多発生の条件となっている(±～+)。

(3) 防除上注意すべき事項

ア ハマキムシ類は世代数が多く発生期間が長いため、各態の虫が混発している。発生が多い園では成虫の発生時期と量に注意し、発蛾最盛期7～10日後の若齢幼虫期防除を徹底する。

イ 幼虫は葉と葉が重なった部分や、へたと果実の間に多く潜んでいるため、散布むらがないよう十分量の薬液を丁寧に散布する。





【果樹共通：果樹カメムシ類（チャバネアオカメムシ）】

（1）予報の内容

発生量：前年より多

ア 8月2半旬及び5半旬調査の結果、ナシ及びカキでの被害果は前年並であり、越冬成虫量・ヒノキ球果着生量が同程度であった2019年並であった（±）。

ナシ(8月2半旬) 被害果率 0.15% (前年 0.05%、2019年 0.3%)

発生ほ場率 22.2% (前年 14.3%、2019年 30.0%)

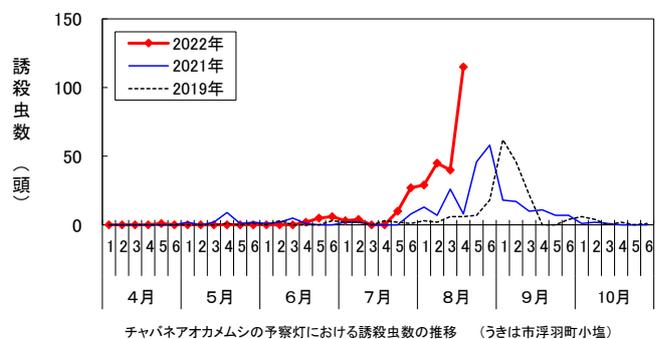
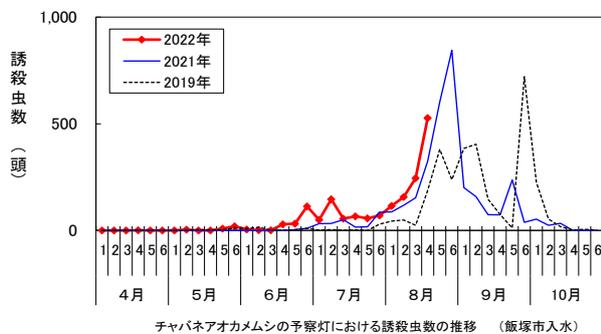
カキ(8月5半旬) 被害果率 0.3% (前年 0.2%、2019年 0.1%)

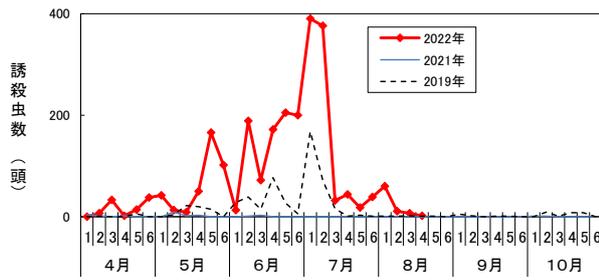
発生ほ場率 36.4% (前年 36.4%、2019年 9.1%)

イ 4月1半旬～8月4半旬までの予察灯及びフェロモントラップによる成虫誘殺数は前年及び2019年より多かった（+）。

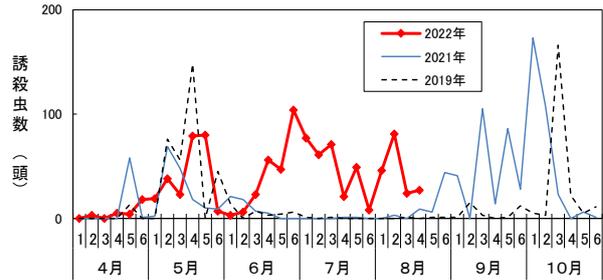
予察灯（6ヶ所）平均 : 828頭（前年 292頭、2019年 301頭）

フェロモントラップ（4ヶ所）平均 : 843頭（前年 81頭、2019年 20頭）





チャバネアオカメムシのフェロモントラップにおける誘殺数(筑紫野市吉木)



チャバネアオカメムシのフェロモントラップにおける誘殺数(うきは市吉井町)

ウ 8月5半旬の果樹カメムシ類のヒノキ球果ビーティングによる成幼虫捕獲虫数は前年よりやや少なく(−〜±)、2019年よりやや多かった。

1 地点当たりの平均捕獲成幼虫数：10.9頭(前年 13.4頭、2019年 8.0頭)

エ 8月5半旬の12地点のヒノキ1球果当たりの平均口針鞘数及び被害球果率は前年及び2019年より多く、9月中に新世代成虫のヒノキからの離脱予測時期目安(25本)に達する地域は多いと予想される(+)

1 地点当たりの1球果口針鞘数：10.7本(前年 7.1本、2019年 6.5本)

被害球果率：90%(前年 76%、2019年 87%)

オ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている(±)。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 果樹園への飛来時期は地域差が大きいと考えられ、同一園内でも被害発生状況は偏りがあるため、園内全体を注意して見回り、飛来を認めたら直ちに防除する。

イ 広範囲に移動するため、薬剤散布は広域一斉防除の効果が高い。

ウ 薬剤防除の際は、収穫前日数等農薬使用基準を遵守する。

エ 降雨があると薬剤の残効が短くなるので、散布間隔に注意する。

オ カイガラムシ類などの天敵に影響のある薬剤を使用する際は、該当する害虫にも効果のある薬剤を選択する。

カ 今後の発生状況等については、病虫害防除所ホームページを参照する。

<<http://www.jppn.ne.jp/fukuoka/doukou/hassei.html>>

【野菜：冬春イチゴ(育苗期)】

1 炭疽病

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年より多

(2) 予報の根拠

ア 8月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや多かった(±〜+)。

発病株率 0.6%(平年 0.3%、前年 0.1%)

イ 向こう1か月の気象予報では、多発生の条件となっている(+)

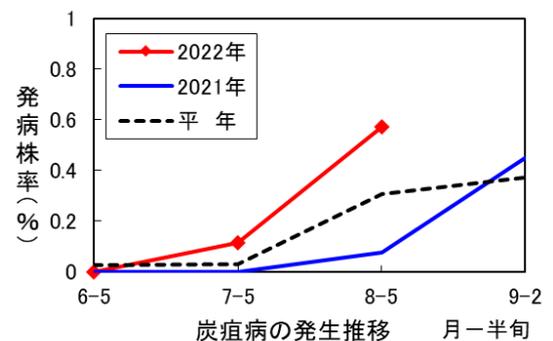
(3) 防除上注意すべき事項

ア 高温期の激しい降雨や過剰なかん水により、急速に感染が拡大することがある。ほ場内をこまめに見回り、発病株やその周辺株を速やかに持ち出し処分することで、発病の拡大防止に努める。

イ 育苗床の湿度が高いと発病しやすく、雨媒伝染により感染が拡大するため、苗の間隔を空け風通しをよくする。

ウ 窒素肥料を多用すると発病しやすいため、適正な肥培管理に努める。

エ 発病後に治療できる薬剤はないことから、感染を防ぐため、葉かき作業直後や降雨前後を含めて定期的な予防散布を徹底する。なお、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。



オ 夜冷短日処理や低温暗黒処理を行う場合は、入庫前に生育状況を確認し、健全苗を選抜する。

カ 入庫する際は、過湿を避けるために苗を詰めすぎないように注意する。

2 ハダニ類

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 8月5日半旬調査の結果、発生量は平年よりやや少なかった（－～±）。

寄生株率 4.9%（平年 7.9%、前年 2.2%）

イ 向こう1か月の気象予報では、やや多発生の条件となっている（±～＋）。

(3) 防除上注意すべき事項

ア ほ場内や周辺の雑草は増殖の場となるので、除草を徹底する。

イ 寄生株は葉かきを強めに行い、寄生葉を取り除くよう努める。なお、摘葉した葉はほ場内に放置せず、ビニル袋等に入れて密封し、処分する。

ウ 多発後は防除が困難になるので、発生状況に注意し、発生初期の防除を徹底する。

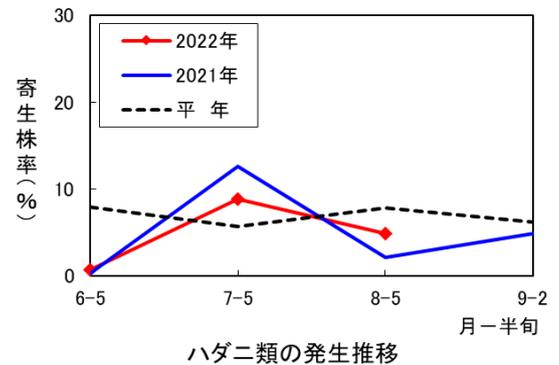
エ 薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統薬剤の連用は避け、ローテーション散布する。また、葉裏に農薬が付着するよう、下葉かぎ後に防除を行うと効果的である。

オ 夜冷短日処理や低温暗黒処理を行う場合は、入庫前に必ず防除を行い、本ぼにハダニ類を持ち込まないようにする。

カ 土着天敵を活用する場合は、天敵への影響が小さい薬剤を使用する。

<県ホームページ掲載の「令和4年度版病害虫・雑草防除の手引き」-「IPMの推進」-「イチゴのIPMマニュアル」参照>

https://www.pref.fukuoka.lg.jp/uploaded/life/642621_61350538_misc.pdf



【野菜：野菜共通】

1 ハスモンヨトウ

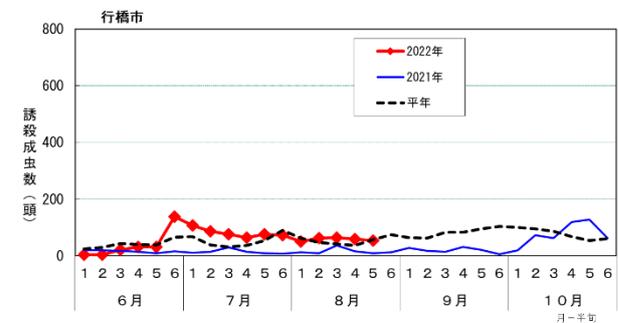
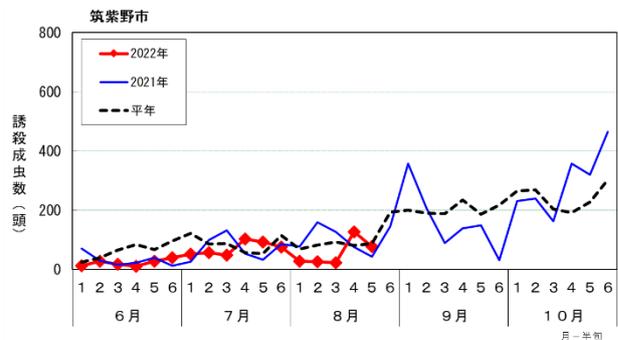
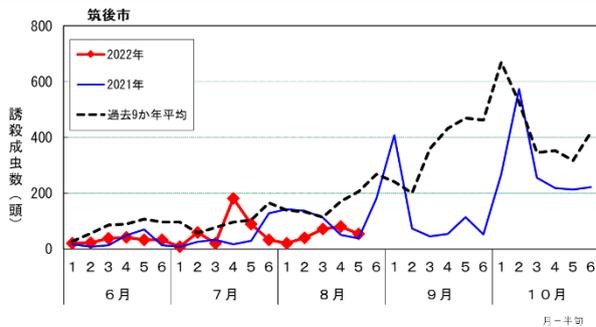
(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 8月のフェロモントラップにおける誘殺虫数の推移は平年並であった（±）。

イ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている（±）。



(3) 防除上注意すべき事項

ア フェロモントラップを活用した防除適期の目安は、誘殺ピークから10日目頃であるが、地域によって誘殺数に差があるため、ほ場で発生状況を必ず確認し、防除する。

イ 薬剤防除は、若齢幼虫を対象に実施する。

ウ 今後の発生状況については、病害虫防除所のホームページを参照する。（以下のオオタバコガ、コナジラミ類についても同様） <<http://www.jpnpn.ne.jp/fukuoka/doukou/hassei.html>>

2 オオタバコガ

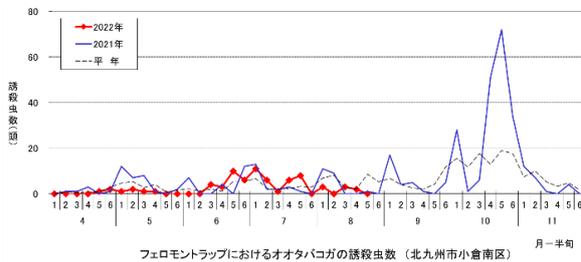
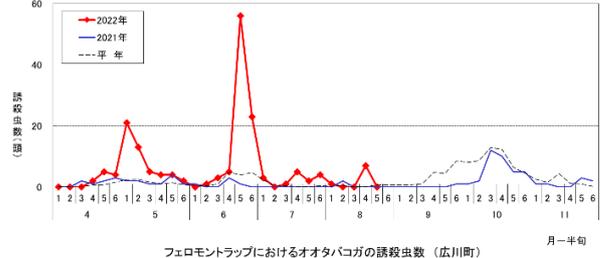
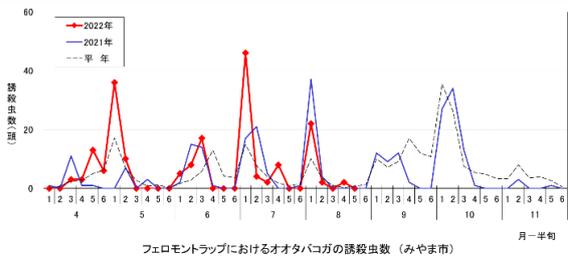
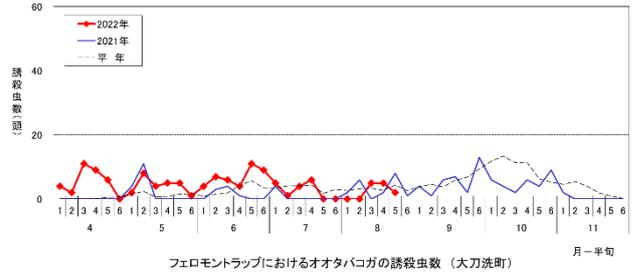
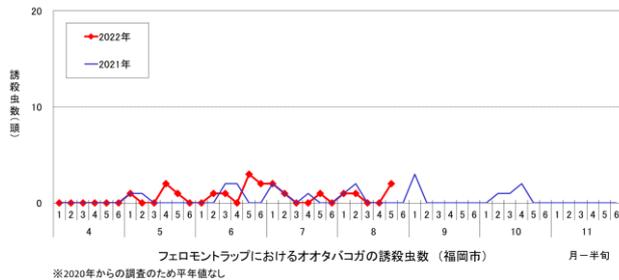
(1) 予報の内容

発生量：平年・前年よりやや多

(2) 予報の根拠

ア 8月のフェロモントラップにおける誘殺虫数の推移は平年よりやや多かった（±～+）。

イ 向こう1か月の気象予報では、やや多発生の条件となっている（±～+）。



(3) 防除上注意すべき事項

ア 地域によって発生量に差があるため、発生を確認したら直ちに防除を行う。

イ 薬剤防除は、若齢幼虫を対象に実施する。

3 コナジラミ類

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年よりやや多

(2) 予報の根拠

ア 8月の粘着板トラップにおける捕獲虫数の推移は平年並であった（±）。

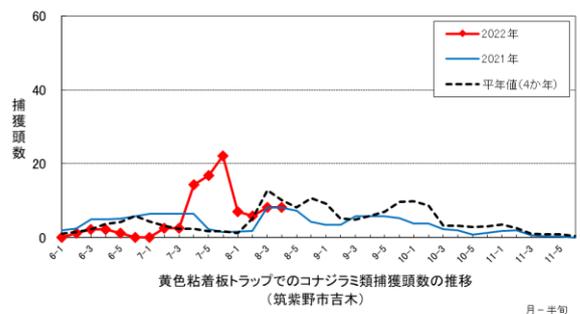
イ 向こう1か月の気象予報では、やや多発生の条件となっている（±～+）。

(3) 防除上注意すべき事項

ア ほ場内や周辺の雑草は増殖の場となるので、除草を徹底する。

イ 施設内への成虫の飛び込みを防止するため、防虫ネットの目合いは0.4mm以下にする。

ウ 施設内側に黄色粘着シートを設置するなどして早期発見に努め、発生を確認次第、薬剤防

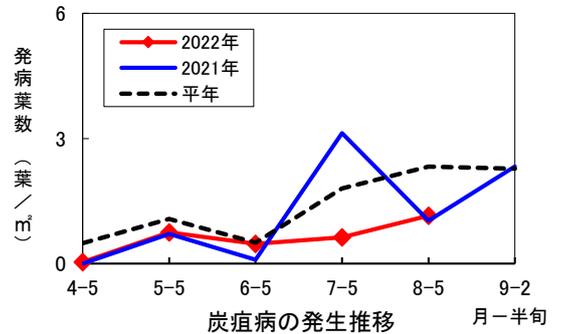


- 除を行う。
- エ 苗による持ち込みを防ぐため、育苗時から防除を行い、本ぼへの持ち込みを防ぐ。
- オ 「入れない、出さない、増やさない」対策を徹底する。

【茶】

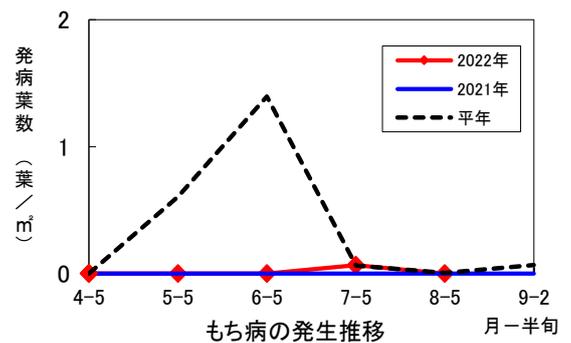
1 炭疽病

- (1) 予報の内容
 - 発生量：平年・前年並
- (2) 予報の根拠
 - ア 8月5半月調査の結果、発生量は平年よりやや少なかつた（-～±）。
 - 発病葉数 1.1葉（平年 2.3葉、前年 1.0葉）
 - 発病ほ場率 77.8%（平年 47.2%、前年 77.8%）
 - イ 向こう1か月の気象予報では、やや多発生の条件となっている（±～+）。
- (3) 防除上の注意
 - ア 秋芽での発生に注意し、4～5葉期の防除を行う。
 - イ 薬剤感受性低下を避けるため、同一系統薬剤の連続散布を避け、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。



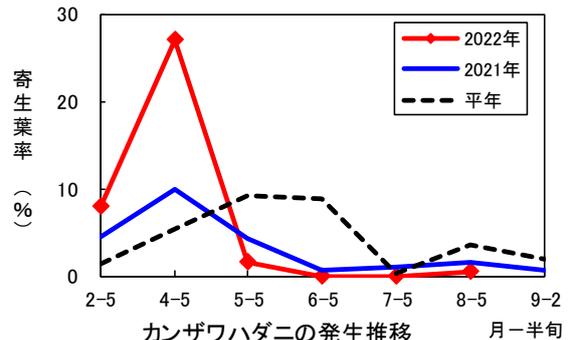
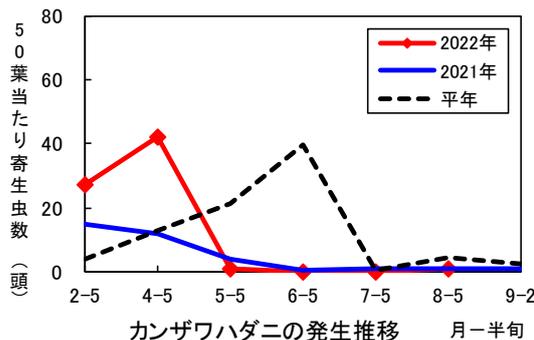
2 もち病

- (1) 予報の内容
 - 発生量：平年・前年並
- (2) 予報の根拠
 - ア 8月5半月調査の結果、発生量は平年並であつた（±）。
 - 発病葉数 0葉（平年 0.01葉、前年 0葉）
 - 発病ほ場率 0%（平年 0.6%、前年 0%）
 - イ 向こう1か月の気象予報では、やや多発生の条件となっている（±～+）。
- (3) 防除上の注意
 - ア 秋芽生育期に降雨が多いと、感染～発病しやすくなる。
 - イ 今年、多発した園では、萌芽期の防除を徹底する。



3 カンザワハダニ

- (1) 予報の内容
 - 発生量：平年・前年並
- (2) 予報の根拠
 - ア 8月5半月調査の結果、発生量は平年よりやや少なかつた（-～±）。
 - 50葉当たり虫数 0.7頭（平年 4.3頭、前年 1.0頭）
 - 発生葉率 0.4%（平年 3.6%、前年 1.6%）
 - イ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている（±）。



- (3) 防除上の注意

- ア 発生状況をよく観察し、発生葉率が2%以上の茶園では、多発する前に速やかに防除を行う。
- イ 多発している園では、効果の高い薬剤を裾葉や葉裏に薬液が十分かかるよう丁寧に散布する。
- ウ 薬剤感受性低下を避けるため、同一系統薬剤の連続散布を避け、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。

4 チャノコカクモンハマキ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年よりやや多

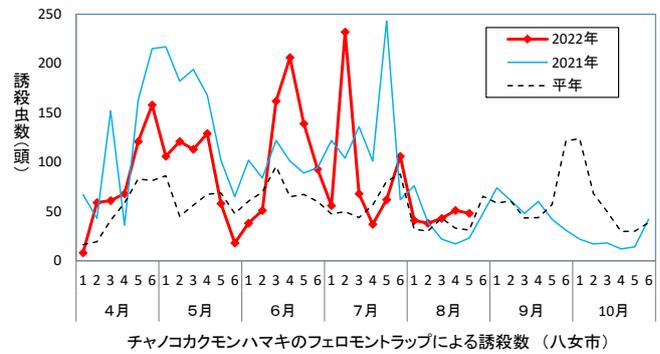
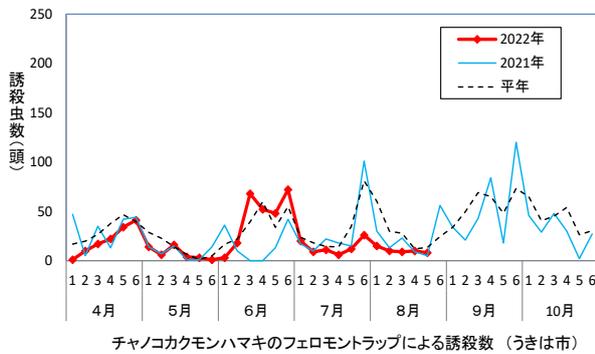
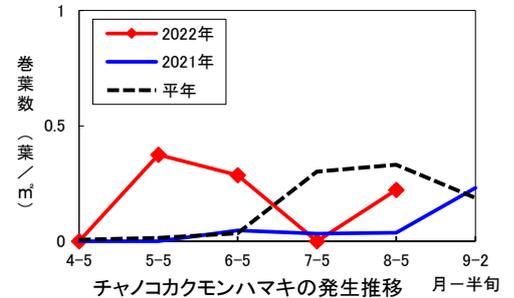
(2) 予報の根拠

- ア 8月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった(±)。
1㎡当たり葉巻数 0.2葉(平年 0.3葉、前年 0.04葉)
発生ほ場率 33.3%(平年 21.0%、前年 11.1%)
- イ 第2～3世代と考えられる7月1半旬～8月4半旬までのフェロモントラップによる雄成虫誘殺数は、平年並であった(±)。

誘殺数 <うきは市> 128頭(平年 348頭、前年 258頭)

<八女市> 734頭(平年 505頭、前年 922頭)

- ウ 向こう1か月の気象予報では、やや多発生の条件となっている(±～+)。



(3) 防除上の注意

- ア ほ場での成虫の発生状況をよく観察し、成虫が最も多い時期から7～10日後を目安に防除を行う。
- イ 巻葉後は防除効果が劣るため、巻葉が確認されたら直ちに防除を行うとともに、散布むらがないよう十分な薬量を丁寧に散布する。

5 チャノホソガ

(1) 予報の内容

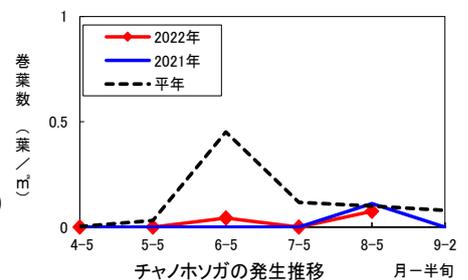
発生量：平年・前年よりやや多

(2) 予報の根拠

- ア 8月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった(±)。
1㎡当たり葉巻数 0.1葉(平年 0.1葉、前年 0.1葉)
発生ほ場率 11.1%(平年 15.4%、前年 22.2%)
- イ 向こう1か月の気象予報では、やや多発生の条件となっている(±～+)。

(3) 防除上の注意

- ア ほ場での成虫の発生状況をよく観察し、成虫が最も多い時期から7～10日後を目安に防除を行う。
- イ 巻葉後は防除効果が劣るため、巻葉が確認されたら直ちに防除を行うとともに、散布ムラがないよう分量な薬量を丁寧に散布する。



6 チャノキイロアザミウマ

(1) 予報の内容

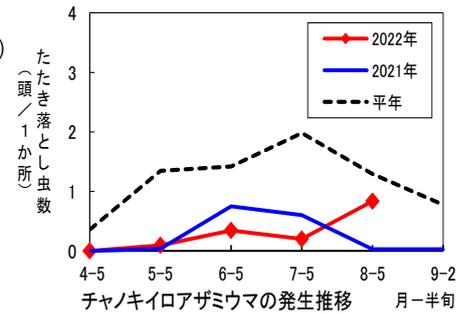
発生量：平年・前年よりやや多

(2) 予報の根拠

- ア 8月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった(±)。
たたき落とし虫数 0.8頭(平年 1.3頭、前年 0.03頭)
発生ほ場率 33.3%(平年 53.9%、前年 11.1%)
- イ 向こう1か月の気象予報では、やや多発生の条件となっている(±~+)。

(3) 防除上の注意

- ア B5判板上の10回たたき落とし法で、10頭以上見られる場合は防除を行う。



7 チャノミドリヒメヨコバイ

(1) 予報の内容

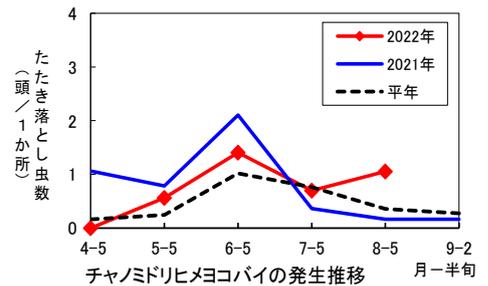
発生量：平年・前年より多

(2) 予報の根拠

- ア 8月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや多かった(±~+)。
たたき落とし虫数 1.1頭(平年 0.4頭、前年 0.2頭)
発生ほ場率 55.6%(平年 44.7%、前年 33.3%)
- イ 向こう1か月の気象予報では、やや多発生の条件となっている(±~+)。

(3) 防除上の注意

- ア 二番茶期以降は成幼虫が混在するため、発生状況に注意し、B5判板上の10回たたき落とし法で、4頭以上見られる場合は防除を行う。



8 チャトゲコナジラミ

(1) 予報の内容

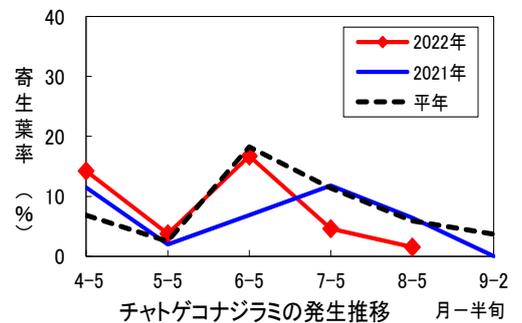
発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

- ア 8月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや少なかった(-~±)。
発生葉率 1.6%(平年 5.9%、前年 6.4%)
発生ほ場率 33.3%(平年 49.2%、前年 77.8%)
- イ 向こう1か月の気象予報では、やや多発生の条件となっている(±~+)。

(3) 防除上の注意

- ア チャトゲコナジラミは年3~4回発生し、防除適期は成虫発生後の若齢幼虫発生期である。このため、発生状況をよく観察し、成虫が最も多い時から14日後を目安に防除をおこなう。
- イ 幼虫は葉裏に発生しているため、農薬の散布にあたっては、葉裏に十分にかかるように丁寧に散布する。



農薬の安全・適正使用、飛散防止対策の徹底を！

福岡県では、農薬を使用する機会が増える6月から8月を農薬の安全かつ適正な使用及び保管管理、使用現場における周辺への配慮を周知徹底するとともに、農薬による事故防止を目的として、「令和3年度 農薬安全使用運動」期間と定め、農薬の適正使用と危害防止について情報発信を実施する等、関係機関、団体と一体となって取り組みを強化しています。

使用者の安全はもちろん、人畜・隣接作物・河川等への配慮について、ご指導をお願いします。

1 農薬適正使用の徹底

○適用作物、使用量や濃度、使用時期、総使用回数などが記載されたラベルをよく確認し、使用基準を遵守する。

※農薬の種類によっては、登録の内容がメーカーによって異なるので、ラベルをよく確認する。
(例：スミチオン水和剤40は、メーカーによって適用作物名や適用病害虫名が異なる)

○有効期限切れの農薬は使用せずに、産業廃棄物として処分する。

2 飛散防止対策の徹底

○風の弱い時に散布する。

○風向、散布方向、散布時間、散布圧などに留意する。

○飛散しにくい農薬（剤型）や飛散が少ないドリフト低減ノズルを使用する。

○散布ほ場周辺の収穫前の作物には十分注意する。

○農薬散布の実施において、周囲の生産者、住民に周知を図る。

3 保護具の着用

○農薬の散布前に、ラベルの注意・警告マークをよく確認する。マスク、保護メガネ、ゴム手袋等を着用し、薬液を作成する。

4 農薬の散布後は、必ず散布器具を洗浄

○噴霧器、薬液タンク、ホースなどの散布器具を十分に洗浄し、残液はほ場外への流出や環境や後作に影響を与えないよう配慮して、ほ場内の農作物が植え付けされていない土壤にまく。

5 防除履歴の記帳

○農薬の散布が終わったら、作物名、ほ場の場所、使用年月日、薬剤名、使用濃度、使用量等を正確に記帳する。

6 空容器の処分

○空容器は、地域の農業用廃プラスチック適正処理推進協議会が実施する回収や、産業廃棄物処理業者に委託するなど、適切な処分を行う。また、野焼きは『廃棄物の処理及び清掃に関する法律（廃掃法）』で禁止されているので、絶対に行わない。